

「矢野豪雨災害かみしばい製作委員会」の活動を見学しました。

広島市安芸区にある矢野公民館で2024年1月27日（土）に開催された「平成30年豪雨災害子どもたちの思い出展示と紙芝居上演会」（完成発表会）を見学しました。



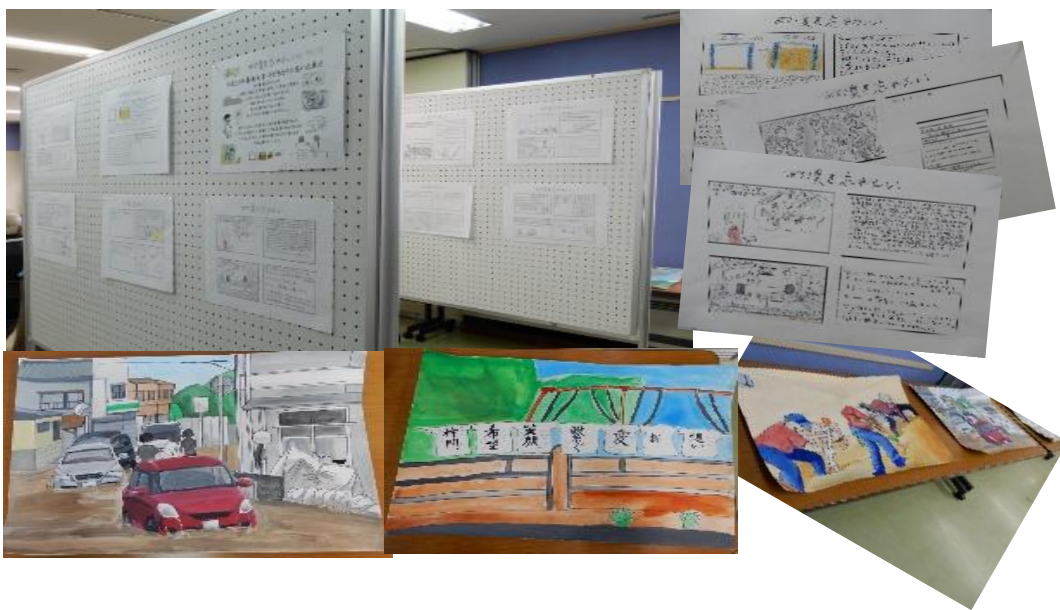
会場に入ると、「あの夏を忘れない」と題して、子ども達が豪雨災害で経験したことを思い出して書いた絵や言葉の掲示が目飛び込んできました。これは、矢野小学校PTA会長の太田さんらの呼び掛けで設立した製作委員会が矢野にある3つの小学校の6年生を対象に、当時1年生だった時に経験した思い出を募集、124名の児童から寄せられたものの一部です。製作委員会のメンバーは、その中から、これと思うエッセンスを拾い、後世に伝えるための紙芝居のストーリーを考え、矢野中学校の美術部の生徒が絵を描き、安芸南高校の生徒と一緒に紙芝居に仕上げられたそうです。



ストーリーは、ヤノカさんという小学1年生の女子児童が主人公。兄と両親の家族4人が豪雨の日から町の復旧までどのように過ごしたかが描かれています。お話の最後には、6年生になったヤノカさんが登場。彼女は、どうして災害が起こるのか、どうすれば災害を免れることができるのかを考え、日ごろの準備や防災の心構えを勉強して防災博士ちゃんの称号をもらいます。そして、自分が勉強するだけでなく「とにかく早めに非難しましょう。地球は人間より圧倒的に強くて大きく絶対になかない。それを敬う気持ちを忘れずに、そ

ここに住まさせていただきます！」と説いて回るというお話でした。

今回の完成発表会には、製作委員会のメンバー6名に加えて、安芸南高校の生徒2名が演者として参加しておられました。活動に参加したきっかけは、学校の授業「総合的な学習(探究)の時間」のテーマとして「防災」に取り組んだところ、この活動と出会ったそうです。「防災についてより深く知り学ぶことができた。周囲のみんなにも伝えていきたい」「全国からいろいろな人たちが町の復旧のために来てくれたことについて、改めて、ありがたいと思った」など、今回の活動を通しての気づきを話してくれました。今回この活動に参加した小学生から高校生は、防災意識の向上に加えて、地元を愛する心も育まれたことと思います。



公民館を後にし、JR 矢野駅まで太陽のぬくもりを感じながらゆっくり歩くと、5年前に被災したことなど想像すらできないほど美しい川や町並みが続いていました。演者の皆さまや紙芝居の主人公ヤノカさんの言葉を思い出しながら、私も防災意識を持ち、周囲の人に伝えていきたいと思いました。

「矢野豪雨災害かみしばい製作委員会」は平成30年(2018年)7月の西日本豪雨災害時に広島市安芸区矢野地区で起こった事柄を、紙芝居で表現することにより、被災、復興の様子を記録・伝承することを目的として2023年1月に結成された団体です。

(本郷)